

'hear tell'型をめぐる史的考察：初期中英語を中心に

浦田，和幸
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/6222>

出版情報：言語文化論究. 3, pp.85-96, 1992-01-31. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：



‘hear tell’ 型をめぐる史的考察

——初期中英語を中心に——

浦田 和 幸

*English*² s. v. *hear* 5)

1. 序

通時的に見ると、「不定詞付き対格」(‘Accusative with Infinitive’) は、英語統語法の中では顕著な発達を遂げた構文の一つであり、その発達に関する史的考察はこれまで多くの学者によってなされている¹⁾。不定詞付き対格は既に古英語の時代より用いられたが、中英語期に入り次第に拡大の傾向を示し、特に14世紀から16世紀にかけて大きく発達したというのがその概略である²⁾。小論においては、全体の流れとしては不定詞付き対格が発達していく一方で、その陰に隠れ次第に姿を消していった、不定詞付き対格構文の一用法について取り上げることにする。

まずは、現代英語に残存する例を見てみよう。

- (1) I’ve often *heard tell* of the wonderful parties she gives, but I’ve never been invited.

(*Longman Dictionary of Contemporary*

例文 (1) では、「誰が述べたのか、誰から聞いたのか」の部分が明示されていない、換言すれば、不定詞 ‘tell’ の意味上の主語が欠如しているわけである。しかし、言うまでもなく、現代英語において ‘hear’ が不定詞を従える際には、意味上の主語を伴うのが文法規則である。例文 (2) 参照。

- (2) Did you *hear him* go out?

小論では、不定詞の意味上の主語が明示されない (1) のような構文を総称して ‘hear tell’ 型 (以下、[–Subject] 型) と呼ぶが、これは今日の英語では「化石的」語法であり、現代英語の辞書においては成句として扱われるのが普通である³⁾。しかしながら、古英語・中英語のテキストに接すると、かつては、[–Subject] 型がより頻繁に用いられる構文であったことは誰しも経験するところである。

史的考察を加える出発点として、ここで

- 1) 古典的研究としては、例えば、Zeitlin (1908) を挙げることができる。又、最近の研究としては、Manabe (1989), Fischer (1989) などがある。尚、従来の研究状況を概観するには、Fishcer (1989: Chap. 2) が簡便。
- 2) Cf. Mustanoja (1960: pp. 526–27)
- 3) E. g. ‘hear tell’, ‘hear say’, ‘make believe’. Cf. Jespersen (1940: 18.5.4.–18.5.8.).
- ちなみに、『ジーニアス英和辞典』(1988) は、‘hear say [tell] of O=hear say [tell] that...’ の項 (s. v. *hear*) で、この成句を「hear *people* say ... の省略形」として説明している。又、ほぼ同様に、‘make believe’ (s. v. *believe*) に関しては、「make *people* believe などの目的語の省略から」と記している。通時的に見れば「省略」という表現には問題があるが、現代英語を共時的にとらえる際には、(特に学習辞典においては、) 適切な説明法であろう。

The Oxford English Dictionary (s. v. *Hear* v. 3. c.) における記述を確認しておきたい⁴⁾。

Hence, by ellipsis of such objects as *people, persons, some one*, before the infinitives *say, speak, talk, tell*, the phrases *to hear say, hear tell*, etc., of which some are still in dialectal or colloquial, and occasionally literary use.

これは、不定詞の意味上の主語が明示されない場合についての記述である。この記述に続き、第1例として、古英語の *Beowulf* (ll. 581-82) より 'secgan hyrde' 例が引かれる。このことより、まず、hear の [-Subject] 型が古英語に存在していたことは明らかである。しかし、上掲の後半の記述より、現代英語においては、この種の構文の使用範囲が狭まっていることも同時にうかがえる。

hear 以外の動詞にも目を向けるならば、例えば see の場合、*OED* (s. v. *See* v. B. 1. f.) は [-Subject] 型を 'Obs[olete]. rare.' と表示している。又、make に関しても、*OED* (s. v. *Make* v. 53.) は 'Obs[olete].' とする⁵⁾。

このように *OED* の記述を見るだけでも、[-Subject] 型が衰退の一途をたどったことが察せられる。

以下、具体的な考察に移る。まず古英語を出発点として [-Subject] 型の問題点を概観し、次いで初期中英語に関する調査結果を示しつつ、本構文がたどった歴史の一面を実証的にとらえたいと思う。

2. 古英語における状況とその後の変化 ——概観

最初に、Mitchell (1968, 1985) に基づき、古英語における [-Subject] 型の問題点を概観する。次に、Fischer (1989) により、古英語から後の時代に至る変化の動向を探ることにする。

2.1. Mitchell (1968, 1985)

Mitchell (1968: §. 161) は、古英語における不定詞付き対格では、不定詞の意味上の主語 ('subject accusative') が明示される場合と、明示されない場合があると述べ、後者の例 (つまり、小論では [-Subject] 型と呼ぶ例) として、以下を現代語訳とともに挙げている。

(3) & ðe cyðan hate (lit. 'I order [someone] to make known to you...')

(4) he het hie hon on heam gealgun (lit. 'he ordered [someone] to hang them on the high gallows')

そして、これらの例において不定詞の意味上の主語が明示されていないのは、'either because everybody knows or because nobody cares who is to perform the action' であると述べる。

上記の例に見られる能動形不定詞をめぐる、それが能動的意味を持つか、あるいは受動的意味を持つのかについて、従来様々な議論がなされている。この問題に関するMitch-

4) 参考のため、*OED* s. v. *Hear* 3. c. に先行する *OED* s. v. *Hear* 3. a. の記述を挙げておく。

'As with other verbs of perception, the subst. or pronominal object may be followed by an *inf.*, *pres. pple.* (orig. *vbl. sb.* with *a-*), or *pa. pple.*, expressing an action performed or suffered by it.'

5) Cf. *OED* s. v. *Do* v. 23, *Gar* v. 2d.

ell (1968: § 161) の見解を見ておこう。

In these, it is very convenient to translate the infinitives *cyðan* and *hon* as if they were passive— ‘I order you to be told’ (or ‘...that you be told...’) and ‘he ordered them to be hanged’. Much time has been spent in idle controversy over the question whether these infinitives were actually passive; what is important is that, when the subject accusative of the accusative and infinitive is not expressed, the active infinitive can usually be translated as a passive.

Mitchell (1968) に続く Mitchell (1985) は、‘*The pattern *se apostol bebad wæter beran/to berenne*’ と題する節 (§ §. 375–65) において、‘verbs of commanding and the like’, ‘verbs of causing and permitting’, ‘verbs of sense perception’, ‘verbs of mental perception’ に伴う例を検討し、上に引用した見解 (Mitchell: §. 161) をさらに強く主張した上で、最後に、‘I myself remain reluctant to admit that “the possibility of the passive interpretation of these infinitives” ever existed for native speakers of OE.’ と結んでいる。

(3) (4) に代表される古英語の能動形不定詞の意味に関して ‘idle controversy’ (Mitchell (1968: §. 161)) を繰り返すことを小論では控えるが、能動的意味を持つとする彼の見解は十分に妥当性があると思われる⁶⁾。

2.2. Fischer (1989)

Fischer (1989) は、英語における不定詞付き対格構文の発達の一因として、SOV 型から SVO 型へという語順の変化を挙げる。本節では、小論のテーマである [–Subject] 型に関する見解を中心に見ていくことにする。

まずは、古英語の [–Subject] 型についての意見 (pp. 205–06) を以下に引用する。

I will assume that the basic word order of OE was SOV, which changed to SVO in the course of the ME period... Because of this SOV word order, a NP immediately preceding a verbal element (whether finite or non-finite) would be analysed as the object of that verb unless the verb was lexically intransitive, or the context made such a reading impossible. Thus, where a speaker of NE would automatically interpret *pone diacan* in (83) as the object of the matrix verb *het*, an OE speaker would interpret it as the object of the verb following it, i.e. the infinitive *unscreydan*,

(83) ... one [*sic*] het on his gesihðe pone diacon unscreydan...

... and commanded in his sight the deacon undress...

(... and commanded (someone) to undress the deacon in his presence...)

(ÆCHOM I, 29 424. 11)

これは、語順を手掛かりとする解釈である。古英語の能動形不定詞の態に関しては、2.1. で概観した Mitchell (1968, 1985) の見解と

6) 最新の研究としては、Fisher (1991: p. 173) 参照。ここでは、格 (case) を根拠に論じられる。‘*Moyses forbead swyn to etenne*’ などの例における格の問題を検討した後に、‘... it seems certain that it is the infinitive that assigns case to the underlined objects, viz. that the infinitive must be active.’ と述べている。

同一線上にある。

語順の変化 (SOV 型→SVO 型) が [-Subject] 型構文に及ぼした影響について、Fischer (1989: p. 207) は次のように述べる。

The old order, with the object NP before the infinitive, is still found in ME, when the basic word order is already changing towards SVO. However, because of this new word order, the pressure to interpret the NP before the infinitive as subject became increasingly strong, so that some change became necessary.

そして、語順の変化が引き起こした混乱を避けるには、以下のような不定詞構文が可能であったと考えている。

- (i) 不定詞の目的語を不定詞の後に置く
(e.g. I command to kill *him*)
- (ii) 受動形不定詞を用いる (e.g. we wyll
command the gates to be kept
aboute)

語順を論拠とする Fischer (1989) の仮説を手掛かりにし、以下、初期中英語における [-Subject] 型構文について考察することにする。

3. 初期中英語の場合——事例研究

ここでは、初期中英語における状況の一端を明らかにするため、実際に文献にあたって調査した結果を示す。調査した文献は、残存する初期中英語文献の中では比較的早い時期に属する代表的散文、*Ancrene Wisse* と

Katherine Group (i.e. *Seinte Katerine*, *Seinte Juliene*, *Seinte Marherete*, *Hali Meiðhad*, *Sawles Warde*) である⁷⁾。各作品について、写本年代、創作年代、略語、写本名、使用した版を以下に列挙する⁸⁾。

- c 1230 (?a 1200) *AW* (CCCC 402):
Ancrene Wisse: Parts 6 and 7, ed. G. Shepherd (1972), pp. 1-30.
- c 1225 (?c 1200) *SK* (Bodley 34):
Seinte Katerine, ed. S. R. T. O. d'Ardenne and E. J. Dobson (1981), odd pp. 1-130.
- c 1225 (?c 1200) *SJ* (Bodley 34):
Pe Liflade ant te Passiun of Seinte Juliene, ed. S. R. T. O. d'Ardenne (1961), odd pp. 3-71.
- c 1225 (?c 1200) *SM* (Bodley 34):
Seinte Marherete, ed. F. M. Mack (1934), even pp. 2-54.
- c 1225 (?c 1200) *HM* (Bodley 34):
Hali Meiðhad, ed. B. Millett (1982), pp. 1-24.
- c 1225 (?c 1200) *SW* (Bodley 34):
Sawles Warde, ed. J. A. W. Bennett and G. V. Smithers (1968), pp. 247-261.

3. 1. 不定詞付き対格を従える動詞

まず最初に、不定詞の意味上の主語が明示された構文 ([+Subject]) と、それが明示されない構文 ([-Subject]) の例をそれぞれ挙げておく。

[+Subject]

- (5) [E]leusius *pe hwile lette his men makien a mucche fur mid alle*. *SJ* 647

7) *Ancrene Wisse* については、Part 6 と Part 7 のみを調査した。*Katherine Group* に関しては、浦田 (1991) に提示した資料を参考にした。

8) 年代は *Middle English Dictionary* の 'Plan and Bibliography' による。

表 1

		[- Subject]	[+ Subject]	小 計
(1)	bidden ('command')	8	1	9
(2)	bringen ('cause')		1	1
(3)	cheosen ('choose')		1	1
(4)	demen ('decree')	1		1
(5)	dihten ('ordain')	1	1	2
(6)	don ('cause')		3	3
(7)	driuen ('compel')		1	1
(8)	zetten ('grant')		3	3
(9)	haten ('command')	21	4	25
(10)	helpen ('help')		1	1
(11)	heren ('hear')	1	1	2
(12)	hihin ('urge')		1	1
(13)	ifinden ('find')		2	2
(14)	iheren ('hear')		2	2
(15)	iseon ('see')	1	8	9
(16)	leaden ('compel')		2	2
(17)	learen ('teach')		1	1
(18)	leoten ('allow, cause')	10	19	29
(19)	leuen ('allow')		7	7
(20)	makien ('cause')	1	33	34
(21)	prokien ('incite')		1	1
(22)	readen ('advise')		4	4
(23)	schapen ('cause')		1	1
(24)	schilden ('forbid')		2	2
(25)	seon ('see')		11	11
(26)	spurien ('incite')		1	1
(27)	turnen ('alter')		1	1
(28)	polien ('allow')		1	1
(29)	wearnen ('forbid')		1	1
合 計		44 (28%)	115 (72%)	159

- 68

[-Subject]

- (6) *Het hire prefter kesten i cwalmhus...* SK 567-68
 (7) *Bed bi liues coste keasten hire i cwalmhus...* SM 18/18-19

調査した資料の中で、不定詞付き対格を従

える動詞の数は29、用例の総数は159である。
 表1参照。

表1より、[-Subject]型を伴う動詞は、
 bidden, demen, dihten, haten, heren,
 iseon, leoten, makienである。そのそれぞ
 れについて [-Subject] の比率に目を向け
 ると、(例がわずかな demen, dihten, heren
 はともかく,) 動詞によってかなりはっきり
 した傾向がうかがえる⁹⁾。これらのうち、[-

9) Cf. Manabe (1989: 4. C. 2.)

Subject] が圧倒的に優勢な動詞として, bidden (89%), haten (84%) の 2 語を指摘することができる。逆に, [-Subject] が圧倒的に劣勢であるのは, iseon (11%) と makien (3%) である。又, leoten においては, [-Subject] の占める割合は34%で, [-Subject] がかなり劣勢であることがわかる。以上のことを表に示すと次のようになる。

表 2

	[-Subject]	[+Subject]
bidden	8 (89%)	1 (11%)
haten	21 (84%)	4 (16%)
leoten	10 (34%)	19 (66%)
iseon	1 (11%)	8 (89%)
makien	1 (3%)	33 (97%)

限られた資料から一般化を行うのは危険であるが, 表 1, 2 の結果は, 13世紀初頭における [-Subject] 型構文の実態を反映していると言える。

3.2. [-Subject] 型構文

ここでは, 2.2. で紹介した Fischer (1989) を参考にして, 収集した資料を語順の点から検討する。不定詞が他動詞である場合と, 自動詞である場合をそれぞれ別個に扱うことにする。

3.2.1. 不定詞が他動詞の場合 (40例)

不定詞が他動詞である場合, [-Subject] 型構文は以下に示す語順で現れる¹⁰⁾。特に, NP の位置に注目したい。('Verb' = 不定詞句を従える定型動詞)

(i) Verb NP Infinitive (6例)

(ii) Verb Infinitive NP (32例)

(iii) NP Verb Infinitive (2例)

全体的にみると, (ii) の 'Verb Infinitive NP' 型 (つまり, 2.2. に示した 'I command to kill him' 型) が大半を占める (80%)。

NP と Verb の 2 要素に着目すると, NP が Verb の右に現れる (i) と (ii) の合計 (38例) は, NP が Verb の左に現れる (iii) (2例) に対して, 95% : 5% という比率を示す。このことより, (iii) はかなり例外的な語順であることがわかる。

今度は, NP が Verb の右に現れる (i) と (ii) に関して, NP と Infinitive の語順という点から見てみると, NP を後置する (ii) 'Verb Infinitive NP' 型 (32例) が, NP を前置する (i) 'Verb NP Infinitive' 型 (6例) に対して, 84% : 16% という結果を示している。2.2. で言及した Fischer (1989) の仮説との関連で初期中英語の語順を考察する際, (i) と (ii) の割合がもっとも重要である。特に留意したい。

では, (i) から (iii) の例を見てみよう。ここでは, NP を (a) 名詞 (句), (b) 代名詞, (c) 節に分類して例を示す。

(i) Verb NP Infinitive

(a) 名詞 (句) (2例)

(8) Ant lette o wodi wise a swiðe
wunderlich hweol meten ant
makien... SJ 544-45

(b) 代名詞 (4例)

(9) ... ant ane for hire sake me
hat ham to luuien. AW 30/
32-33

(ii) Verb Infinitive NP

(a) 名詞 (句) (14例)

10) 1つの動詞が2つ以上の [-Subject] を従えることがあるが, 語順を扱うここでは, 1番目のもののみ考察の対象とした。又, 関係代名詞は義務的に前置されるため, 目的語が関係代名詞である例は除外した。

- (10) ... ant bed bringn anan *pis*
meiden biuoren him... SK
 160

(b) 代名詞 (16例)

- (11) ... let bringen *hire* forð...
 SK 219

(c) 節 (2例)

- (12) [E]leusius, þe reue, het lokin
3ef ha liuede... SJ 490

(iii) NP Verb Infinitive

(a) 名詞(句) (1例)

- (13) ... ant *hire* *liflade* al lette
 don o leaue... SM 52/29

(b) 代名詞 (1例)

- (14) Ant he *ham* het, euch fot,
 heafdes bikeoruen. SJ 642-43

さて、ここで、2.2. に引用した Fischer (1989: p. 207) の仮説を再び思い起こしたい。語順の変化 (SOV 型→SVO 型) により、'Verb NP Infinitive' 型における NP を、Infinitive の目的語としてではなく、主語として解釈する要請が強まった。その結果、解釈上の混乱を避ける方策の1つとして、'Verb Infinitive NP' 型を用いることがあった¹¹⁾、というのが彼女の意見である。

語順の視点から [-Subject] 型構文を論ずるには、その前提として、語順に関する当時の一般的状況を知っておく必要がある。Ancrene Wisse (Parts 6 and 7) の語順を扱う Kubouchi (1975) より、小論にとって参考になる箇所を次に引用する。

1. In all the types of clauses, unless preceded by adverbials, the use of the S. V. and S. V. O. or S. V. C. orders is widespread and shows a tendency to

increase.

3. While the word-order S. pron. -O. V. is still found not only in dependent clauses but also in independent ones, the order S. noun-O.V. is only found in dependent clauses. Even in coordinate clauses after *ant* and *ah* a noun object never precedes the verb in *AW*. The order S. O. V. shows a marked tendency to diminish. (p. 28)

Ancrene Wisse (Parts 6 and 7) における結果のみから判断するのは危険であるが、SOV 型から SVO 型への移行は、かなり進行していたと察せられる。このことを念頭において、再び、(i) 'Verb NP Infinitive' 型と (ii) 'Verb Infinitive NP' 型の比率 (16% : 84%) に注目したい。仮に当時の言語が SVO 型であったとすれば、Infinitive の目的語 (NP) を後置するのが自然である。我々の資料において (i) の比率が低いのは、もはやこの時代には、不定詞の目的語を前置することに対して、ある種の不自然さが感じられたためであろう。NP が代名詞であっても、やはり 'Verb NP Infinitive' 型 ((i b)) は少なく (20%)、大半は 'Verb Infinitive NP' 型 ((ii b)) である (80%)。

以上、13世紀初頭の英語では、'Verb NP Infinitive' 型が、'Verb Infinitive NP' 型に比べ 'marked' な語順であることを見てきた。

さて、2.2 で触れた通り、Fischer (1989) は、'Verb NP Infinitive' 型に生じた問題点を回避するための今一つの手段として、受動形不定詞の使用を挙げている。

('... the object could be left in place, and the infinitive passivized...' p. 207)

11) Cf. Fischer (1989: pp. 208-10)

ちなみに、受動形不定詞の発達を論ずる Fischer (1991) は、不定詞付き対格における受動形不定詞について次のように述べている。(pp. 161-62)

The occurrence of passive infinitives in a.c.i. constructions is more difficult to date. Neither Visser nor van der Gaaf give any figures, but judging from the examples given, they seem to become frequent only in the late Middle English period. The earliest instances given in Zeitlin (1908) are from Robert of Gloucester (c 1352) and *Cursor Mundi* (?a 1400 (a 1325)); in Meier (1953: 143) from *Havelok* (a 1325 (c 1300)); after *bidden* and *witen* the earliest examples are found in *Genesis and Exodus* (a 1325 (c 1250)) (Zeitlin 1908: 58-59; Meier 1953: 143).

我々の資料では、makien の後に受動形不定詞の例が見られる。これは中英語の例としては、上で言及されたいずれの例よりも早い。しかし、不定詞付き対格構文における受動形不定詞の例はわずか2例に過ぎず、調査した文献の中では稀な用法であると言ってよい。(15) と (16) では、makien が受動形不定詞を従えている。

(15) Ant ich hit am pet makede þen
muchele witti witege, Ysaie, *beon*
isahet þurh ant þurh to deaðe. SJ
359-61

(16) Ant ich hit am þet makede Sein
luhan þe Baptiste *beon* heafdes *bi-*
coruen. . . SJ 369-71

更に、'Verb NP Infinitive'型を避けるた

めの手段と考えられる、もう1つの事例について触れておきたい。それは、不定詞の意味上の主語として、'man' という語が用いられる場合である¹²⁾。不特定な人間を指す語 'man' が、[+Subject] 型の中で不定詞の意味上の主語として用いられる例は、我々の資料においてごく稀である。このような場合には、[-Subject] 型を用いる方が普通であろう。

(17) Pulli þoht makeð *mon* te fleon alle
unþeawes. . . SW 417-18

受動形不定詞が用いられる(15)と(16)、そして、'man' が不定詞の意味上の主語を示す(17)が、いずれも makien の例であることより、1つの推論を試みたい。既に 3.1. で見た通り、makien の場合、[-Subject] の [+Subject] に対する割合は 1 (3%) : 33 (97%) であった。少なくとも我々の資料に関する限り、makien には [-Subject] 型を避けようとする傾向が強く見られる。よって、[-Subject] 型を避けるための手段として、(15)-(17) のような例外的表現が用いられたのではないかと考えられる。

3.2.2. 不定詞が自動詞の場合 (2例)

該当するものはわずか2例にすぎない。目的語を伴わない不定詞が [-Subject] 型構文に現れるのは、極めて例外的である。

(iv) Verb Infinitive

(15) Nabbe ze iherd *tellen* of þe preo
hali men? AW 12/35-36

(v) Infinitive Verb

(16) Me dude as he *don* het. . . SM 42/
34

12) Cf. Takahashi (1984: p. 203)

4. 結 び

以上、現代英語の 'hear tell' などに残存する、不定詞の意味上の主語が明示されない 'hear tell' 型 ([-Subject] 型) の歴史を、初期中英語を中心に見てきた。調査の対象とした文献は、13世紀初頭頃に書かれたとされる *Ancrene Wisse* (Parts 6 and 7) と *Katherine Group* である。

[-Subject] 型に関して、主に以下の結果を得た。

- (1) [-Subject] : [+Subject]
= 44 (28%) : 115 (72%)
- (2) [-Subject] 型を従える動詞

bidden (8)	heren (1)
demen (1)	iseon (1)
dihten (1)	leoten (10)
haten (21)	makien (1)
- (3) [-Subject] が占める割合 (動詞別)

	[-Subject]	[+Subject]
bidden	89% (8)	11% (1)
haten	84% (21)	16% (4)
leoten	34% (10)	66% (19)

iseon 11% (1) 89% (8)

makien 3% (1) 97% (33)

(4) 語順 (Infinitive が他動詞の場合)

(a) Verb Infinitive NP 32 (80%)

Verb NP Infinitive 6 (15%)

NP Verb Infinitive 2 (5%)

(b) Verb Infinitive NP : Verb NP
Infinitive = 84% : 16%

収集した資料を、Fischer (1989) の仮説に基づいて検討した。語順が SOV 型から SVO 型に移行したため、'Verb NP Infinitive' 型における NP が、Infinitive の主語であるとみなされる可能性が高まった。そこで、'Verb NP Infinitive' 型に代わる表現法として、彼女は以下のものを挙げている。

(i) 'Verb Infinitive NP' 型

(ii) 受動形不定詞

(i) に関しては、(4 b) に示したとおり、'Verb NP Infinitive' 型は少なく、'Verb Infinitive NP' 型が圧倒的に多い。

(ii) の受動形不定詞に関しては、該当するものわずか 2 例にすぎない。我々の資料では、これは極めて例外的な表現法である。

BIBLIOGRAPHY

- d'Ardenne, S.R.T.O. (ed.) 1961. *De Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne*. EETS 248. London : Oxford Univ. Press.
- d'Ardenne, S.R.T.O. and E.J. Dobson. (eds.) 1981. *Seinte Katerine*. EETS SS 7. London : Oxford Univ. Press.
- Bennett, J.A.W. and G.V.Smithers. (eds.) 1968. *Early Middle English Verse and Prose*. 2nd ed. Oxford : Clarendon Press.
- Fischer, O. 1989. 'The Origin and Spread of the Accusative and Infinitive Construction in English'. *Folia Linguistica Historica*. 8. 143-217.
- _____. 1991. 'The Rise of the Passive Infinitive in Old English.' *Historical English Syntax*. ed. Dieter Kastovsky. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Jespersen, O. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part V. Copenhagen : Ejnar Munksgaard.
- Kubouchi, T. 1975. 'Word-Order in the *Ancrene Wisse*'. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 16. 1. pp. 11-28.

- Mack, F. M. (ed.) 1934. *Seinte Marherete*. EETS 193. London : Oxford Univ. Press.
- Manabe, K. 1989. *The Syntactic and Stylistic Development of the Infinitive in Middle English*. Fukuoka : Kyushu Univ. Press.
- Millett, B. (ed.) 1982. *Hali Meidhad*. EETS 284. London : Oxford Univ. Press.
- Mitchell, B. 1968. *A Guide to Old English*². Oxford : Basil Blackwell.
- _____. 1985. *Old English Syntax*. Oxford : Clarendon. Press.
- Mustanoja, T. F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki : Société Néophilologique.
- Shepherd, G. 1972. *Ancrene Wisse : Parts 6 and 7*. Manchester : Manchester Univ. Press.
- Takahashi, M. 1984. 'Subjectless Infinitive Complements of Causative Verbs and Perceptive Verbs in OE and ME.' *Descriptive and Applied Linguistics*. 17. pp. 199-210.
- Visser, F. Th. 1969, 1973. *An Historical Syntax of the English Language*. Part III. 1st Half and 2nd Half. Leiden : E. J. Brill.
- Zeitlin, J. 1908. *The Accusative with Infinitive and Some Kindred Constructions in English*. New York : Columbia Univ. Press.
- 浦田和幸. 1991. 「*Katherine Group* における『不定詞付き対格』」. *Lexicon*. 21. pp. 294-307.

The 'Hear Tell' Type in English

—With Special Reference to Early Middle English—

Kazuyuki Urata

In Present-day English, the 'hear tell' type (i.e. the construction in which the subject accusative of the 'accusative with infinitive' is not expressed; hence the [–Subject] type) is ungrammatical, with the exception of some idiomatic expressions, e.g. 'hear tell', 'make believe'.

I've often *heard tell* of the wonderful parties she gives, but I've never been invited.

In Old and Middle English, however, the subject accusative is often left unexpressed, as in

he *het* hie *hon* on heam gealgum

'he ordered [someone] to hang them on the high gallows' (Mitchell 1968 : §. 161)

De wari *het* hire *kasten* in cwarterne

'The wicked man commanded [someone] to cast her into the prison'

According to Fischer (1989), 'the change in word order that English underwent between the OE and ME periods' (p. 205) (i.e. SOV→SVO) exerted a great influence on the [–Subject] type. With her hypothesis in mind, this paper examines the [–Subject] type in the early 13th century, based on a corpus of *Ancrene Wisse* (Parts 6 and 7) and the *Katherine Group*.

Among our findings are :

- (1) [–Subject] : [+Subject] = 44 (28%) : 115 (72%)
- (2) The Number of occurrences of the [–Subject] type with each verb

bidden (8)	demen (1)	dihten (1)	haten (21)
heren (1)	iseon (1)	leoten (10)	makien (1)
- (3)

	[–Subject]	[+Subject]
bidden	89% (8)	11% (1)

haten	84% (21)	16% (4)
leoten	34% (10)	66% (19)
iseon	11% (1)	89% (8)
makien	3% (1)	97% (33)

- (4) The Word order of the [-Subject] type (when the Infinitive is transitive)
- (a) Verb Infinitive NP 32 (80%)
 Verb NP Infinitive 6 (15%)
 NP Verb Infinitive 2 (5%)
 - (b) Verb Infinitive NP : Verb NP Infinitive=84% : 16%

Fischer (1989 : p. 207) argues that because of the new word order (i. e. SVO), ‘the pressure to interpret the NP before the infinitive as subject became increasingly strong, so that some change became necessary’.

One of the options that she mentions is the construction in which the NP is placed after the Infinitive. From (4b) above, it may safely be said that the new order ‘Verb Infinitive NP’ was by far the commoner in the early 13th-century English.

Another option is the passive infinitive. In our corpus, it occurs only twice in the ‘accusative with infinitive’ construction.